

東北 VALUE SIGHT 山形



社会福祉法人恩賜財団済生会支部山形県済生会
特別養護老人ホームながまち荘 施設長
峯田 幸悦 (みねた・こうえつ)

1980年東北福祉大学卒業後、社会福祉法人恩賜財団済生会支部山形県済生会に特別養護老人ホーム愛日荘の生活指導員として入職。2005年同会特別養護老人ホームながまち荘施設長に就任。2013年一般社団法人山形県老人福祉施設協議会会長、山形県防災士会副会長。2015年山形大学 東北創生研究所連携研究員。2016年山形県地域包括・在宅介護支援センター協議会会長。

特別養護老人ホーム ながまち荘
山形県山形市長町751番地
TEL 023-684-2391
山形県済生会 <http://www.yamagata-saiseikai.org>

介護職員の人材不足が常態化するなか、現在、日本では、経済活動の連携強化の観点から、EPA（経済連携協定）に基づいた外国人介護福祉士候補者を受け入れている。その数は増加傾向にあり、2015年度には累積で2,000名を超えているという（厚生労働省ホームページより）。実際に外国人を受け入れているながまち荘では、確かな手応えを感じており、さらなる意義も見いだしながら、日々まい進している。

求められる介護ニーズと 先の見えない人材不足

団塊の世代が75歳になり介護ニーズが増大すると見込まれる2025年、厚生労働省は約38万人の介護職員が不足すると推計している。また、安倍首相が「一億総活躍社会」に向け新三本の矢の一つとして掲げる介護離職ゼロ。その具体的手段は、施設数を増やす事による入居待機者の解消であるが、当然、その担い手としても多くの介護人材が必要とされていくであろう。

それらの事から、介護職員の確保は国としても最優先事項に思われるが、現実はどうであろうか。人を募っても職員確保が難しいほどの慢性的な人手不足、そして、職員の出入りが激しい事による定まらない介護サービスの質、そんな閉塞感漂う介護現場に魅力を見いだせない職員の離職。介護人材確保については、あらゆる方策により、その量と質両面の体制整備を講じていく必要があると危機感を募らせている。

ながまち荘が掲げる科学的介護とは

ながまち荘は、特別養護老人ホームという常時介護を必要とし、在宅生活が困難になり「要介護認定」を受けた高齢者が生活する施設である。

ながまち荘では、高齢になっても、人間がいつまでも尊厳を守りながら自己決定、自己実現できる生活への支援（「自立支援」）に努めており、具体的な実施手段として「007～ゼロゼロセブン～」という目標を打ち立てている。オムツゼロ、胃瘻ゼロ、

介護の国際的展開に向けて ～外国人介護職員の受け入れと介護の世界的拠点へ～

骨折ゼロ、褥瘡ゼロ、拘束ゼロ、下剤ゼロ、タバコゼロという7つのゼロにより自尊心を守る介護を行い、安易な延命処置や不適切で不健康につながるような介護を行わない等、医療、福祉、栄養、リハビリ等の各専門職の高い専門性に裏付けされた、言わば科学的根拠に基づいた介護を行っている。

そしてこの事は入居者の生活の質を向上させるだけでなく、職員が高い専門スキルを習得する為の人材育成にもつながっている。

外国人介護職員の活用

冒頭でも述べたが、介護人材不足が常態化している中、これまでの方法でこの難局を乗り切ることは容易ではない。そこでながまち荘では、外国の方のマンパワー活用にかじを切る事にしたのである。ただ、外国の方の活用といっても言葉や文化、風習の違い等、世間ではまだまだ不安が多い。私は「案ずるより産むがやすし」ではないが、まずは実践してみようという事で、2010年に経済連携協定（以下、EPA）による介護福祉士取得候補者としてインドネシアから女性2人を施設に受け入れた。

当初、生活用品は何があるか、必要なことを分かりやすく伝えるにはどうしたら良いか等、職員が試行錯誤しながら関わっていたのを覚えている。彼女らは3年間施設に雇用されながら、結果として1名は介護福祉士に合格する事ができた。現在は事情により2人とも帰国してしまったが、EPAという制度

の中で選抜されて来日し、研修センターで日本語や日本文化の学習を集中的に受けてきた能力は現場でも十分に通用し、むしろそのスキルの高さは、正に今求められる人材のレベルにあると確信している。

現在もEPAによるインドネシア人男性2人を受け入れており、来年度も同国から4人を受け入れる予定である。また、外国の方の活用と活躍に向け、EPAだけではなく、技能実習生、定住外国人、留学生のそれぞれの立場を踏まえて、どのように介護業界の現状と合わせていけるか、意見交換や検討の場を設け、外国人介護職員受け入れの標準化への働きかけも行っている。

介護の世界的拠点を目指して

ながまち荘では、EPAを通じて親交を持つようになったインドネシアの学校へ職員を渡航させたり、最近では連携強化の為に協定の手続きも進めている。また、山形県内に住む外国人介護職員同士の交流会を定期的に開催したり、アメリカ、中国、フィリピン等からの視察も積極的に受け入れる等、国際的な展開や交流の頻度が増えてきている。そして、そういったやり取りで見えてきた事は「日本の介護は質が高い」という事である。世界では介護技術や介護施設だけでなく、そもそも介護という概念が存在しない等、まだまだ介護というものが整備されていないところが少なくない。実際、EPAできている彼らも、日本で質の高い介護を学び、将来は自国に施設

を建てたいという夢を抱いている。介護人材不足からの外国人介護職員の受け入れであったが、国際的に関わる事で、今や世界の介護事情や日本としてできる役割等、国際的な発信や貢献活動といった新たな意義も見いだしている。

ながまち荘を介護の世界的拠点とし、高品質な介護のノウハウを国外で展開出来れば、介護が整備されていない国でも認知症ケアを行えるようになる等、日本も介護を世界に誇れる分野として示せ、双方の利につながると強く感じている。そういった国際的な仕組み作りに向け、そして日本が「介護先進国」と呼ばれる日を目指し、目下、ながまち荘は突き進んでいる。



インドネシアから介護福祉士を目指して来ている2人。仕事熱心で、日本語も上手、頼もしい存在である。